

## パーリ諸註釈書に見られる Bhanaka をめぐって

森 祖 道

Buddhaghosa の Visuddhimagga も含んで、パーリ三蔵に  
 対して aṭṭhakathā の類に現われた Bhanaka と同じには、  
 既に Adikaram の研究がある<sup>(1)</sup>。即ち彼は Bhanaka の起源・  
 種類・各 Bhanaka の間の主張の相違、更には Buddhaghosa  
 の時代の Bhanaka の実態などに關して論じている。又、彼  
 の研究に全面的に依りつつ、そこに若干の訂正を加えた Go-  
 onsekere の解説を出している<sup>(2)</sup>。そこで筆者は aṭṭhakathā に  
 見られる Bhanaka を aṭṭhakathā の原型の成立との関連に  
 おいて検討してみたい。

若しパーリ aṭṭhakathā 中に現われる Bhanaka の種類  
 は、Dīgha, Majjhima, Saṃyutta, Aṅguttara, Jātaka, Dha-  
 mmapada の各 Bhanaka などの主なるものとする。又これ  
 らの外に、律藏中の Ubbaho-vibhaṅga (Makavibhaṅga と  
 Bhikkhunivibh.) の Bhanaka, Mahācattārisakabhāṅga (大  
 十經 M. No. 117) Mahā-ariya-vamsabhāṅga (大聖種經 A II  
 -27B) などの名も存する。これらの諸 Bhanaka の中で、Di-

ghabhāṅga が最も数多く現われ、又、その中には Dīgha-  
 bhāṅga Abhaya, Majjhimbhāṅga Reva, Jātakabhāṅga  
 ka Mahāpaduma などいろいろ如くその名前や生存年代が明ら  
 かなキヤロンの Bhanaka 達の逸話を教訓も見られ、更に又、  
 各 Bhanaka によつて異つた教理的見解が保持されていた事  
 も随所に示されているのである。しかして一番問題とな  
 るのは、Dīghanikāya 以下の五 nikāya 中の最初の四 nika-  
 ya の Bhanaka のちがそこに見出され、第五の Khuddaka-  
 nikāya の Bhanaka が存在しない事である。即ち現在  
 の aṭṭhakathā 中に現われる Bhanaka は nikāya に關して  
 は、撰述の如く、Dīgha, Majjhima, Saṃyutta, Aṅguttara の  
 四 nikāya と Jātaka や Dhammapada の各 Bhanaka を加  
 えただけである。更にこの事実を軌を一にして、それを一層明  
 確に見出せるものとして、Samantpāsādikā には次の如き  
 一節が見出される<sup>(3)</sup>。それは upasampadā ちり十年を経、衆  
 僧 (paṇisa) を律の解釈等にして教導すべき立場に立つた

者が、律のある部分に加えて学ばなければならない最少限度の經典を、各 Bhaṅga ごとに規定説明した一節であつて、それによれば、*Majjhimabhāṇa* は *Mūlpaṇṇāsaka* (中部の根本五十經) を、*Dīghabhāṇa* は *Mahāvagga* (長部の大品) を、*Samyuttabhāṇa* は (相應部の) 最後の三 *vagga* か又は *Mahāvagga* を、*Anguttarabhāṇa* は (増支部の) 前半か後半のいずれかを、或いはそれがかなわぬ者は *Tikani-pāṭa* (第三章) 以下の *nipāṭa* を学ばざるべきなのである。又 *Mahāpacari (atthakatha)* は「ただ一 *nipāṭa* だけを学ばずは第四か或いは第五の *nipāṭa* を学ばざるべきである」と説かれてゐる。そこで *Jatākabhāṇa* は *Jataka* をその *atthakathā* と共に学ばざるべきである。或いは又「*Dhammapada* もその *vathu* (物語) と共に学ばざるべきである」と *Mahāpacari* には説かれてゐるのである。以上の一節にも四 *nikāya* の外には、*Jataka* とそれに付随した形で *Dhammapada* の名が出てゐるだけであつて、*Khuddaka* の名はそこに見出されな

い。言ひ迄もなく、*Khuddakanikāya* 自身は他の四 *nikāya* よりも遅れて成立し、その原初の構成の成立はアナーカ王の時代(西紀前二六八又は二七二—二三三)即ち西紀前三世紀頃であると考えられるので、西紀後五世紀以降の *atthakathā* の制作者達は勿論 *Khuddakanikāya* の存在を熟知してゐたわけ

パーリ諸註釈書に見られる *Bhāṅga* をめぐつて(森)

である。例えば漢訳『善見律毘婆沙』卷一には、*屈陀迦 (Khu-ddaka)* の内容として、今日の構成經典十五經のうち *Khu-ddakapāṭha* を除いた十四經が凡て挙げられていて、*Khuddakanikāya* の構成としては非常に発達した形のものが示されてゐる。それにもかかわらず *Khuddakabhāṇa* は何故 *atthakathā* 中に見出されなかつたのであるか。この問題は *Adikaram* も自ら提起しながら解決し得ていない問題であるが、筆者は、右のこの事實はセイロンにかつて存在したいわゆる古註釈書類 (*Shalāthakatha*) の原型の成立の時期を示す一証として重要であると考えるので、この観点より *Khuddakabhāṇa* 不在の問題を考究してみた。

周知の如く、五世紀前半の *Buddhaghosa* を初めとする註釈家達によつて著わされた現存のパーリ *atthakathā* の類は、内容的にはその時代のものではない。何故ならば、それらはその当時セイロンの *Mahāvihāra* に保存されてゐた、いわゆる古代セイロン語等の古註釈の類に全面的に準拠し、主観的見解を加へることなしにそれらをパーリ語に書き改めたものと看做されてゐる。従つてこれらの古註釈はパーリ *atthakathā* のいわば *source* であり、*Adikaram* はこれを一応二八種のものに分類してゐる。そしてこれら古註釈書の原初的部分の多くは、それが何語のものであつたかは別として、インド本土に於て成立し、後次第に三蔵の場合と同様に、インド

よりセイロン島に口伝又は写本として伝来されたものと考えられる。伝統説によれば、これらの古註釈はアソーカ王の王子マヒンダによつてセイロン語に訳されたとされているが、その史実性はともかくとして、アソーカ王の時代に始まつた仏教のセイロンへの移入に伴つて、それらの多くはその後漸次、インドより伝えられた事は確かであろう。そして主としてセイロンに於て、これら古註釈の原型に対して様々な付加増広がなされたわけであるが、その主要部分の発達は西紀後一世紀後半頃までで停止し、その後は大幅な増広改変がなされる事なく Buddhaghosa の時代まで保存されていたと考えられている。そしてそれらをパリー語に翻訳しつつ改編し再構成したものが、現存のパリー *aiṭhakattha* に外ならないわけであるが、現存の *aiṭhakattha* の以上の如き資料的特質はこれら *aiṭhakattha* の成立史研究の必要を感ぜしめるものである。そして既に述べた *aiṭhakattha* に於ける Khuddakabhāṇaka の不在とどう事実かは、これを *aiṭhakattha* の被註釈書たる三蔵の成立時期と関連させて考察する時、それは古註釈類の原型成立の時期に対する一つの解答を提示するものと思われる。即ち *nikāya* の構成に關してここに示されている *Dīgha* 以下の四 *nikāya* ナンヌ *Jātaka* 及び *Dhammapada* とどう一つの型は、四 *nikāya* は既に成立しつつたが、*Khuddakanikāya* は未だ成立せず、従つて *Khuddaka* 中に後に

は編入される様になつた或る種の古い經典——それらは正に問題の *Jātaka* であり *Dhammapada* であるわけである——は未だ *nikāya* 外の単經として別行していた」という経蔵成立史上の時期と対応し、その時期の経蔵の構成をそのまゝ反映した形であるといえよう。そしてその時期というのは、四 *nikāya* が成立してから *Khuddakanikāya* が成立する迄の期間、即ち仏滅後百年頃の部派分裂の前後よりアソーカ王の時代頃の間と考えられよう。そしてこれら *Jātaka* や *Dhammapada* という、その原型成立が非常に古い經典は、同様の性格を有する *Udāna*, *Itivuttaka*, *Suttanipāṭa*, *Theragāthā*, *Therīgāthā* などの諸經と共に *Khuddakanikāya* の最初の構成經典となつて、後に *Khuddaka* が成立するわけである。しかし前述の如く *Bhāṇaka* に關する限り、四 *nikāya* ナンヌ *Jātaka* 及び *Dhammapada* の *Bhāṇaka* とどう原初の専門形態が、現存の *aiṭhakattha* には示されているわけであるが、これはパリー *aiṭhakattha* の source たる古註釈類の古い形態の一端をそのまゝ忠実に伝えているものと思積出来よう。何故ならば後述の如く、*Khuddakanikāya* 成立後には *Khuddakabhāṇaka* とどう専門家も存在した事が確かに知られるからである。

さて以上の様に、*aiṭhakattha* に見られる *Bhāṇaka* の種類は、*nikāya* に關つては、四 *nikāya* ナンヌ *Jātaka* 及び

Dhammapada の Bhāṅka というのがその基本的形態であるが、しかし、先に upasampada 後十年の比丘の学習内容として説明された一節に見られる如き四 nikāya トラネ Jātaka (この場合、Dhammapada は Jātaka の付随的存在として扱われている) という分類は他にもその実例が見出される。その第一は Milindapañha の専門化した様々な比丘の名称が列挙されている一節に、Bhāṅka として Jātaka, Dīgha, Majjhima, Saṃyutta, Anguttara, Khuddaka の順に六種の Bhāṅka が挙げられている例である。これは列挙の順より

としても、元来は Jātaka トラネ四 nikāya の Bhāṅka であつたものに Khuddakanikāya の成立以降に、Khuddakabhāṅka がそこにその名を付加されたものと推察されるのであるが、そこには Dhammapadabhāṅka の名は見出されない。次に第二の例は、現存の aṭṭhakathā の source たる古註釈の種類に関するものである。既述の如く、Adikaram はこれを五十二八種ほどに分類しているが、その中で nikāya に関係のある名称を有するものは、Dīgha, Majjhima, Saṃyutta, Aṅguttara の各 aṭṭhakathā に Jātakatṭhakkathā だけである。ここに Khuddaka を添えた四 nikāya トラネ Jātaka という型が見られ、Dhammapadatṭhakkathā の名は見出されない。いずれにしても、Dhammapada を加えるか否かは別として、Khuddaka 以外の四 nikāya トラネ Jā-

taka (トラネ Dhammapada) という型において、nikāya に関する Bhāṅka の種類と、古註釈書のそれとが相互に一致するであろう事は、両者の間に何か密接な関係があつたのではないかと、新たな疑問を投ずるものといえよう。或いは又、Bhāṅka の場合と同様、古註釈に關しても五 nikāya 中 Khuddaka の aṭṭhakathā の名のみが見出さなかつた事は、これら古註釈の原型の成立の時期を、経蔵成立の時期との関連において、われわれに暗示するものがあるといえようか。

(略号表は水野弘元『パーリ語文法』のそれに従つ、パーリ原典は特記のなかり、凡つ PTS 版である)

1 E. W. Adikaram: *Early History of Buddhism in Ceylon*, Colombo, 1953, pp. 24~42.

2 Lakshmi R. Goonesekere: *Bhāṅka* (*Encyclopaedia of Buddhism*, Ceylon, 1968, vol. II, Fascicle 4, pp. 688~690)

3 Bhāṅka が元来、如何なる役割を果した存在であり、その歴史の変遷はどうであつたかなど、この問題についてはなお研究の余地がある。一般には Bhāṅka の訳語として、reciter, repeater, preacher (of sections of the Scriptures) (PTS) reciter (as a kind of entertainer) (BHS)・誦出者・善説法者(南伝総索引)・暗誦者、説法者、研究者、解説者(塚本啓祥)などの語が当てられ、これらはいずれも Bhāṅka の実態の一面を現わすものと考えられる。なお Bhāṅka と關つ

バーリ語註釈書に見られる Bhaṅka をめぐって (森)

- は、塚本啓祥『初期仏教史の研究』三九四—三九五頁、『盧月仏教大辞典』「聲聞」及「梵唄」の項、『梵和大辞典』Bhaṅka の項、*Mahāvastuśāstrī*, Dharmabhaṅka の項、萩原『仏教辞典』八八頁、宇井『菩薩地持論』Dharmabhaṅka の項、静谷正雄「法師 (dharmabhaṅka) のことば」(『印仏研』三卷一号—三十一—三十三頁) など参考のこと。
- 4 VA. II-413, II-428, II-474; DA. I-15, I-131, II-530, II-543, II-635, III-883; MA. I-79, AA. II-249; J. I-59; DhSa. 151, 159, 399; ApA. 157; BvA. 280; VibhA. 81; VM. I-36, I-275, I-286, etc.
- 5 VA. II-413, II-428; AD. I-11, I-15; MA. I-226 footnote 1; AA. I-307, I-309; VM. I-95, I-275, I-286, II-431; DhSa. 420, etc.
- 6 BvA. 192; VM. I-275, I-313, etc.
- 7 AA. II-208; VM. I-74, I-75, II-431, etc.
- 8 MA. II-305; AA. II-249; KhpA. (Pp. I) 151; Sna. I-186; cf. MV. chap. 35 v. 30, etc.
- 9 DhA. IV-51.
- 10 VA. III-644.
- 11 VibhA. 320.
- 12 SA. III-182. cf. Malalasekera: DPPN. vol. II. pp. 462~463.
- 13 その他は Bhaṅka と似た例 (Sna. I-70) & Sarabhāṅka (DhSa. 73) & Padabhāṅka (AA. I-39, II-249) などいろいろ言葉が見られる。

14 たゞ *Manorahaparāṇi* II-249 の本文に *Mahāśīrākabhāṇa*. ka とある箇所が、その脚註 1 によれば、ルマの一本にのみ *Mahāhuddakabhāṇa* となること。

15 VA. IV-789.

16 前田惠学『原始仏教聖典の成立史研究』六八一—六九八頁。

17 大正藏二四卷六七六頁上。

18 Adikaram: *op. cit.* pp. 10~23.

19 *Caḷaṅgīsa* chap. 37, vv. 228~229.

20 Adikaram: *op. cit.* pp. 3 & 87; 水野弘元「ヨシノミ問経類のごとく」(『駒沢大学研究紀要』通巻一七号)五四—五五頁。

21 前田前掲書六九八—七六〇頁。

22 同書六九四—九五頁。

23 *Mūlindapanīya* pp. 341~342.

### 新刊紹介

#### 横超慧日著「中国仏教の研究」第二

仏教における宗教的自覚／鳩摩羅什の翻訳／  
僧叔と慧叔は同人なり／教相判釈の原始形態  
／魏晋時代の般若思想／大乘大義章研究序説  
／大乘大義章における法身説

A 5 判 本文三〇六頁  
法蔵館刊 定価 三二〇〇円